

はじめに

イヌとはすこぶる珍しい生き物です。

現在、日本には1300万頭ほどのイヌが人間と共に暮らしています。この数は、10歳以下の人間の子供の総数を上回っています。個体数が多いだけではありません。イヌには多様な犬種が存在します。純血種のバリエーションは400を超えています。多くの人がイヌに親しみを持ち、「人生にイヌは欠かせない」という人さえいます。

これだけ人間の世界に入り込んだ動物は、他にいません。

ところが、そんなイヌが「何を求めているか」という点については案外知られていません。というより、一般にはあまり関心を払われていないというべきでしょう。

さて、イヌとはどんな動物なのか？

この本では、普遍的ともいえるこのテーマについて探究していきます。同時に、「しつけ」の問題を軸にしつつ、「イヌとどう付きあうか」について皆さんと共に考えていきます。

ここ数年、イヌを科学的に研究しようという動きがひろがりつつあります。2007年、「イヌの科学フォーラム (Canine Science Forum)」がハンガリーのブダペストで開かれ、2年後の2009年にもオーストリアのウィーンで、「イヌ学者」たちのセッションがありました。今後とも継続して開かれていくことでしょう。ドイツでは「イヌ学」が学問のジャンルとして認められてきており、イヌ学専門の大学をつくらうという動きさえあります。

日本も例外ではありません。2009年には、イヌとふれあう際に神経伝達物質オキシトシンがどんな役割を果たしているか、はじめて科学的に突きとめた調査結果が、麻布大学などの研究チームによって発表されています。この報告には、人とイヌの関係を考える上できわめて示唆的な内容が含まれています。

しかし実をいうと、科学者たちがイヌの研究に本格的に乗り出したのはごく最近のことです。IPS細胞がつくられ、人間の臓器を豚の体内で育てようというプロジェクトが進行する時代であるにもかかわらず、ほんの数年前までイヌは色盲であるとされていました。今で

は、人間ほど鮮明ではないとしてもイヌにも色覚があることがわかっています。このこと一つとってみても、科学者たちがいかにイヌの研究をおろそかにしてきたかがわかります。生物学者のあいだでは、イヌなどの家畜動物を研究することは、野生動物の研究に比べてレベルが一段低いことだと見なされていたのです。

「イヌについては、実証データがないから何でも書ける」。以前、こんな声を耳にしたことがあるのは私だけではないでしょう。実際、「何でも」書いている本も存在していました。しかし、今日の研究の到達点は、このようなことはや通用しない段階に差しかかっているのです。

本書では、イヌに関する最新の情報を掬いとり、私なりの見解を提示していきます。ウィーン大学のフリーデリケ・ランゲらの研究チームが行なっている「イヌの知性」に関する実験は、とりわけ注目に値します。

彼らの研究は、従来一部の人たちに固く信じられてきた「イヌは頭がよくない」「イヌに道徳はない」といった意見に修正を迫るものとなっています。

この本には、私自身のやや特殊な体験や国内外で見聞したトピックもふんだんに盛り込まれています。本書を読む前と読んだ後では、あなたのイヌに対する見方が大きく変わるかも知れません。

しません。

ここで断っておくと、この本のタイトルは『犬は「しつけ」でバカになる』ですが、イヌの「しつけ」を全否定する内容ではありません。私が言いたいのは、行き過ぎた「しつけ」や「服従訓練」をしすぎることで、イヌが持っている潜在能力や自発性をつぶしてしまい、結果的にスポイルしているのではないかとということです。

また、「しつけ、しつけ」という前に、改善すべき問題があるということです。日本のイヌの流通の問題をこのままにしておいて「しつけ」論だけを唱えるのは全くナンセンスといふべきでしょう。日本特有の犬の流通システムがイヌを壊しているという事実を、本書では詳らかにしています。

次に、本書の構成を示します。

第1章の「日本の犬はバカだらけ」では、多くの人がうすうす感じているが、あまり体系的には語られていないイヌの格差の問題について考えてみます。

この格差とは、「イヌの学力格差」と「イヌの健康格差」です。

言うまでもなく、この格差の問題には、人が大きく介在しています。その意味で、イヌという動物の生物学的基盤についてはもちろんのこと、社会的な視点で語ることも必要になります。日本のイヌをとりまく状況は、いま新たな局面に差ししかかっているのです。

第2章の「問題犬」はこうして生み出される」では、イヌの成長過程を明らかにする中で、「しつけ」以前の大切なこと、そしてイヌの健全な成長にとって何が必要かについて考察します。この章には、これまでの研究成果を体系的にまとめた上で、従来のイヌの本には書かれていない知見も示しています。きよくたんに丸くなったイヌの頭は脳機能の点で変化をおこしているかもしれないという2010年の報告は、その一つといえます。

第3章の「イヌはヒトに合わせて本能を変えた」では、「犬種差はヒトの個人差ぐらい」というイヌのゲノム解読のトピックから書き起こし、最近の純血種におこっている問題などをとり上げます。本能そのものについても言及します。

第4章の『しつけ本』にだまされるな！」では、最近の科学的な研究成果をふまえた上で、イヌの「しつけ」にかかわる「学習理論」を検証します。

この問題を考察するにあたっては、「イヌの無能さ」をことさら強調するドッグ・トレーナーの思想や方法論の見直しにとどまらず、オペラント条件付けなどの学習理論の成り立ち

やそのバックボーンをひも解いていく必要があります。この章で読みとっていただきたいことの一つは、ドッグ・トレーナーや家庭犬しつけインストラクターの意見を鵜呑みにしてしまうと、思わぬ落とし穴に嵌ることがあるという点です。それを避けるためには、歴史的に考察することが不可欠あり、また反証に目を向けることも必要です。

第5章の「『イヌづきあい』がうまくなる方法」では、ドイツなど諸外国の例にも目を配りつつ、人とイヌの関係について改めてとらえ直し、イヌとどう付きあうかについて、私自身のささやかな考えを述べています。

最低限の「しつけ」でイヌとうまく付きあう。そんなライフスタイルが自然に定着していく。これこそ、実はイヌたちが求めていることではないでしょうか。

本書はすべてこの新書のために書き下ろしたものです。ぜひ全編をご通読賜り、「イヌづきあい」の一助としていただければ、筆者としてはこれに勝る幸せはありません。